

南三陸町のおもてなしの心

ニュースでも被害の甚大だった南三陸町。その町の復興の進展が気になった私たちは、去る 11 月 2 日、この町を訪れました。震災前、活発に行われていた漁業体験などの訪問者受け入れ活動はどうなったのでしょうか。

私たちは南三陸町観光協会の物産振興部門チーフの首藤史明（しゅとうふみあき）さんにお話をうかがいました。首藤さんは以前勤めていた会社が津波で流されてしまい、昨年の 7 月から観光協会で働いています。

今、南三陸町観光協会は、主に部門ごとに仕事に分かれており、『情報部門』『旅行部門』『物産部門』の三つで活動しています。

情報部門は主に、南三陸町をアピールするために作られたものです。この部門の主な活動は二つあります。まず一つ目に歌津地区の商店街にインフォメーションブースを設けて、商店街に来た方への案内や情報発信の場所を設置しています。

また、インターネット『楽天市場』の中に『みなみな屋』という南三陸町観光協会が企画するインターネットショップを開設して南三陸町の震災で仕事を失った人が作った商品の代行販売 PR を行っています。

二つ目に語り部プログラムというものを行っています。このプログラムは民間の語り部ガイドが震災当時の体験談を話し、実際に浸水した場所を見学します。語り部ガイドさんは震災により観光分野の活動が一切できなくなった方たちです。自分たちだからできる復興の一役としてはじめたのが、震災を語り継いでいく活動です。現在は 12 名のメンバーが震災前の南三陸について、自身の体験談、そしてこの震災から得た教訓を伝えています。

この語り部プログラムは大人気です。30 人 1 組で構成され、1 日で 90 人～100 人程度。年間にすると約 6000 人もの方が参加しています。

旅行部門の主な活動であった修学旅行は、震災が起きたことによって中止になりました。家が 7 割、店が 8 割流されてしまった南三陸町で受け入れることは困難と考え自粛していました。しかし、町民は「おもてなし



首藤史明さん

の心」を忘れておらず、徐々に修学旅行の受け入れを考えているそうです。実際に、修学旅行の申し込みが入って来ているそうです。

現在の旅行部門は教育プログラムというものが組み込まれていて、豊かな自然環境や津波による被害状況、海産物を育てる喜び・苦労、食の安全など、漁師さんならではの視線でお話します。自然に生かされている浜の漁師さん方の力強さを体感するプログラムです。

プログラム全体で約 2 時間の内容になっており、洋上にて養殖イカダの見学や試食等を行っています。

物産部門では、南三陸の物を他の地域や県で販売するためにお店を手配したり、「出店に来てください」という他県からの依頼を受けて他県に出向いて南三陸の物を販売したりしています。

他にも「福興市」というイベントを企画しています。幸福と復興をかけて「福興市」と名付けられています。このイベントは昨年の 4 月から毎月行っていて、全国ぼうさい朝市ネットワークに加盟しており他県からも出店しています。全国ぼうさい朝市ネットワークとは災害を想定しながらも、おいしく楽しい防災活動をモットーに様々な県が協力し合う繋がりです。

現在は被災地を見る目が変わってきていて、ニュースにもなっていないような状態となっていますが、実際の南三陸町は瓦礫が撤去されているだけの更地になっています。そのため、被災地とその他の温度差が感じられるそうです。しかし、南三陸町は来てくれる人がいかに満足してくれるかという、「おもてなしの心」を持って接しています。

今後は南三陸町の知名度を残しつつ、自然豊かなところも PR して、観光としても何度も足を運んでもらえるように考えているそうです。福興市は来年以降も出来る限り、続けていき観光協会は通常通り運営出来るように、以前企画していた修学旅行も実行していきたいとおっしゃっていました。

今回南三陸町に行ってみて、まだ被災した状態が色濃く残っており、まだまだ復興という言葉には程遠い状況に感じられました。しかし、首藤さんのお話から、復興しようとする被災地に興味を持ち、手を貸そうとする他県の人たちの温かさが伝わってきました。また、南三陸町の皆さんの復興への努力が強く感じられました。「おもてなしの心」は今も生きているのです。

（佐藤美紀、小沼英実、鈴木愛佳）



＜プログラム＞

1. 町内でガイドと合流
2. 震災時の写真見学
3. 語り部ガイド講話
4. 浸水エリア視察
5. 商店街で買い物

ビジネスマッチ東北で防災研修PR！

私たちのゼミでは、東日本大震災後、石巻地域の復興を進めるために観光業が果たす役割を考えてきました。

11月8日（木）、宮城県仙台市にある夢メッセみやぎにて、ビジネスマッチ東北2012が開催されました。この企画には、ビジネスマッチングや商品のPRと販売を目的として、主に東北で活動を行う企業等、約400団体が参加しました。

私達、丸岡ゼミは石巻専修大学の代表として参加しました。私達は観光関連ブースの一角を借り、防災研修に関する展示と発表、復興大学石巻センターとのコラボレーション企画を行いました。普段とは違うスーツ姿で、やや緊張した気持ちでブースに立ちました。

私達がこのイベントに参加した理由は、東日本大震災からの復興において観光業の果たす役割として防災研修の実施をPRするためです。この研修では、今回の震災によって甚大な被害を受けた石巻地域が時間の経過により、その事実が風化しないよう後世に伝えることと、今後発生する地震や津波などの自然災害において、被害を無くしていくための防災に関する知識を伝えることを目的としています。

私たちがこの日一番心配したのは、防災研修に関するプレゼンテーションでした。プレゼンテーション会場に立つビジネスマンの方は、皆とても流暢で専門的な発表をなさいます。聞く側もビジネスチャンスを見出そうと真剣そのものです。どちらもこの道何十年というベテランばかりに見え、この緊迫した雰囲気の中で、学生のつたない発表が受け入れられるかどうか、不安でした。

ゼミ学生が、防災に関するアンケート調査や研修に関する実績を15分程で発表しました。また、計画しているモニターツアーの企画を宣伝しました。立って聞かれるお客さんも多く、石巻に関する興味がある人は多くいらっしゃるようで、まだまだビジネスチャンスが隠れていると実感できました。発表の終わりには意外なほどあたたかい拍手が起きました。

ブースでの宣伝では、他と比較するとまだまだお客さんは少なく、魅力ある商品開発をしなくてはならないと実感しました。また、実際に運用させていくために経験も積み重ねていくと共に、ビジネスとしてかつ石巻地域への集客手段として、防災研修を魅力的なものに進化させていくことが課題だと感じました。そのためにこれからも大地震や津波に関する防災対策や石巻地域の被災状況に関する学習を深めていかなくてはならないと感じました。

（志賀洋太、菊地駿、小久保敬太）

「直志追球」を掲げる石工野球部

石巻工業高校の野球部は「直志追球」を掲げています。「直志追球」とは、真っ直ぐな志でボールを追う、という意味だそうです。

私たちが所属する石巻専修大学の硬式野球部は石工との練習試合をしました。石工チームはまとまりがあり、元気がある良いチームでした。身近なこの野球部の震災後の健闘ぶりを紹介させていただきます。

石巻工業高校は東日本大震災の津波により壊滅的な被害を受けました。野球部では、震災により部員7割が被害を受けました。施設も大きな被害を受けましたが、部員が一丸なって野球部の再開を目指しました。

その結果、立派なグラウンドも整備されました。津波によりグラウンドは浸水し、練習道具も水に浸かりましたが、ボールやグローブなど多くの物も全国から支援があり、練習することができました。ただ、十分な学習・練習環境ではなかったと思います。

昨年の県大会、東北大会での石工球児たちのプレーは復興に向けて努力する人々に勇気を与え、春のセンバツに「21世紀枠」で選ばれました。

センバツ大会では、被災を感じさせない元気の良さやチーム一丸となり相手に挑む姿勢、1球に対する思いがとて強く伝わりました。試合は負けてしまいましたが、途中で同点に追い付き勝てるのではないかと皆が思った瞬間もある、とても良い戦いぶりでした。応援でも石工は、応援団賞で優勝賞を受賞しました。石工は、全国の人々に多くの感動を与えました。

今後も「直志追球」での活躍を期待しています。

（鈴木成仁、管野裕太）

石巻の積極的コミュニケーション

石巻の震災前の街は、空洞化が進み、市の中心にシャッターが降りたままの店が多くありました。

しかし、震災後の石巻の街は以前よりも活気があります。震災後の混沌とした状況中で、復興の志を持つ人々の活動が街を明るくしているようです。

私は普段石巻の飲食店でバイトをしています。お客さんの様子を先輩方に聞いてみると、震災前はコミュニケーションに消極的な人も多かったのですが、震災後は皆積極的なのだそうです。地震と津波と復興という共通の話題があるからかもしれません。

その先輩はまた、震災後は石巻を盛り上げようと皆で協力し、震災前よりも活気ある街にしようとする明るく楽しい雰囲気が出てきたと言っていました。

宮城県外出身の私は、最初は、石巻は冷たく厳しい人ばかりだと思っていましたが、意外に優しく接してくれる人がいます。釣りに行って、見ず知らずの人に魚をもらったことがあります。

経済の復興だけではなく、石巻市本来の魅力や今の石巻市が持つものを有効活用し、人々を惹きつける街にしていってほしいと思います。

（管野裕太）

皆様からのご意見・ご感想をお待ちしております。

E-mail senshu-maruoka@inter7.jp

